茜色の空が群青色に染まりかけている。朝と夕方の二回だけ二色に染まることができる空はとても幻想的で、何時間でも眺めることができた。

住宅街から離れた場所にあるこの河川敷は、人通りが少なくとても静かだ。川があって空があって星が見える。格好の僕の秘密基地だ。

そんな河川敷で夏祭りが行われていた。いくつもの屋台が建っていて、子どもからお年寄りまでいろんな人が屋台の前で並んで楽しそうに話しながら食べている。

僕はそこから見える風景が好きだったけれど、会場に混ざって何かを食べたりしようとは思わなかった。それは単純にお金を持っていなかったからだけれど、たぶん持っていたとしても食べないだろう。ふらりと外に出てきただけなのに、そこでご飯を食べてきた、なんて家族に言えるわけがなかった。後ろめたさが勝つ僕には自分だけ満足しようとは思わない。

さっきより少しだけ群青色に染まった空と街が反射した川が映っている。

「君、ヨーヨー釣りしないの？」

後ろから女の子の声が聞こえた。振り向くとそこには藍色の上に白い花が印刷された浴衣を着た女の子が立っている。

「……しないです」

まさか知らない女の子から声を掛けられるとは思わなかったので、少しだけびっくりする。昨日も一昨日もここで空を眺めていたけれど、声を掛けられることはなかった。夏祭りというものは不思議だ。

「ひとりで回っても意外と楽しいよ」

そう言って女の子は僕の右隣に座った。屋台の独特な匂いが強すぎてはっきりとはしなかったけれど、微かに花のような香りがした。

「こんなたくさん人が居る中ひとりで回ったら迷子になりますよ」

「確かに、そうだね」

そう言って女の子はケラケラと楽しそうに笑う。何がそんなに面白いのだろう。

「親とは来てないの？」

「来てないです。ここに来ることが日課なので、黙って来ても平気です」

なんて言うのは嘘だ。いくら家が近いからと言っても、夜の六時半に小学六年生の男の子が外に出ることは禁止されている。でも、その事を彼女に伝えるつもりはなかった。

「日課って、ここで何してるの？」
「空を見てるんです」
そう言って彼女の顔を見ると、不思議そうな顔をして僕の顔を見つめていた。思わず僕は変なことをしているのかと不安になる。
「確かに、夕焼けの空って綺麗だもんね」
彼女が肯定してくれたことに驚いた。僕は思わず目を見開く。
お母さんに「空を見に行く」と言って外に出ると絶対に僕の腕を掴んでそんなことするくらいなら勉強しなさいと怒る。だから、無意識に僕は女の人は空を見るのが嫌いなんだと思っていた。
「君の名前ってなんて言うの？」
彼女の言葉で我に返る。
「宇田川（うたかわ）　翔（かける）って言います」
すると彼女は少しだけ目を見開いて驚いた。何か間違ったこと言ってしまっただろうか。
「いい名前だね」
そう微笑んで、彼女は目の前に広がる群青色の空を眺める。もう少しでこの空は黒色に染まりそうだ。
「翔くんは好きなものとかあるの？」
質問に思わず言葉が詰まる。でも不安が彼女に伝わってはいけないと思い、「読書が好きです」と言った。すると彼女は再び驚いたような顔をして「すごい」と言った。本を読むことについてすごいと言われたことが無いから、僕は何がすごいのか分からなかった。
「何が、すごいんですか？」
不思議に思って彼女に質問すると「私、集中力ないから読めないんだよね」となぜか笑いながら言った。
「読書が好きっていうことは、物語考えるの好きなの？」
「そうですね、自分だけの世界が作れる感じがして好きです」
尊敬するなあ、と言って彼女は空を見た。
「なら、私をモデルに書いてよ」
そう言った彼女の横顔は妙に大人びていた。
「そんなの無理ですよ」

「無理かどうかはやってみないと分からないよ」
はっきり言って僕の目を見つめる彼女は真っ直ぐだった。
「何年かかっても私は待ってるから。翔くんの書く物語楽しみにしてるね」
そう言って彼女は河川敷に映る川に目線を戻した。
物語なんて書けないのに。でも彼女が楽しみにしているなら、書いてみようか。
そう思った時、彼女の名前を聞いていないことに気が付いた。
「そういえば、君の名前は――」
僕が彼女の名前を尋ね終わるその前に、河川敷の方で大きな音が鳴った。
その音が花火だと気付いた時、彼女の横顔が照らされた。
彼女は名前をサキと言った。

一章

「宇田川（うたかわ）、そろそろ決めてもいいんじゃないか」

蝉の鳴き声が響く教室に担任の 多嶋（たじま）先生と向かい合わせになって座っている。がたいのいい彼の後ろには風に吹かれて揺れる木々と、青い空が広がっている。

「……さっきも言った通り、やりたいことなんてないです」

僕は話す気になれなくて机に目を落とす。

「そうは言ってもな、もう進路を決めなきゃいけない時期なんだ。なんかこう、ないのか」

多嶋先生は沢山の文字が印刷された紙に目を落としながら伺うような声を出した。

彼は心配性だ。進路が定まってない僕だけを呼び出して、僕の学力でも行けそうな大学の資料を何冊も持ってきて薦めてくる。

「すみません、遅くなりました」

ドアが開く音と同時にお父さんの声が聞こえた。走ってきたのか息が少しだけあがっている。多嶋先生と向かい合わせになって座るお父さんを横目に、資料をまとめる多嶋先生を眺める。

「忙しい中、申し訳ありません」

「いえ、こちらこそわざわざ時間を作っていただいてありがとうございます」

お互いにペコペコと頭を下げるのはなんだか少し物珍しくて、思わず交互に見てしまう。

「翔（かける）くんの進路に関してなんですけど、何かお父様の方から聞いてませんか」

少し不安げに多嶋先生はお父さんの顔を覗き込む。それに対してお父さんはいえ、と言って俯きながら首を振る。

「特に翔の方からは具体的な話は聞いてないんですよね。私は翔が好きなようにしていいと言ってるのですが……」

「そうですか……」

そう言って先生とお父さんの間に沈黙の時間が流れる。逃げ出したいけど逃げ出せられない空気感に俯いていると多嶋先生が「そういえば」と声を上げた。

「宇田川さんってお姉さん居ましたよね？　私、お姉さんの方も担任をしていたんですけど、お元気ですか？」

お姉さん、という言葉に思わず心臓が跳ね上がる。

姉の怜衣（れい）は僕と違って成績優秀でやりたいことが最初から明確だった。病気で亡くなった友人を助けるために看護師が目指せる専門学校に入学した。それは両親に話していたから弟の僕も知っている。それに比べて僕はやりたいことは見つからず、夏休みを突入しても目の前は靄にかかったままだった。僕はつくづく、ついてないと思う。

「元気ですよ。来年卒業する年で今は家に居ないことが多いですね」

「そうなんですね」

お父さんの言葉に多嶋先生は安堵の表情を見せる。その顔を見て少しだけ胸が苦しくなる。

「翔くんはなにかやりたいことないのか」

「……特にないです」

「それなら就職っていう形になるけど、それは何か候補はあるの？」

「……それも特にないです」

目を合わせずにぶっきらぼうに答えると先生は小さくため息をついた。

「お父様から見て翔くんの得意なところってあったりしますか」

「そうですね……」

そう言ってお父さんは天井を見上げながら大人しいタイプなので積極的に何か伝えてくるっていうわけじゃないのですが、と前置きして、

「前々から小説を書いているところは見たことありますよ」

と言った。すると先生は興味深そうにそうなんですか、と驚いたような顔をして言った。

「小説書くの好きなの？」

「いや、まあ……」

正直「小説を書く」と言ってあまりいい人を思い浮かべる人は居ない。なんとなく、根暗で、静かで、プラスのイメージがあるとするなら語彙があるというくらいだろう。今でさえクラスメイトにマイナスなイメージを持たれているのに、「小説を書く」ということを伝えると更にイメージが下がる気がして僕は不安になった。

曖昧に返事すると、先生は「なるほどね……」と頷きながら僕と目を合わせてきた。びっくりして僕は慌てて目を逸らす。

「小説はどのくらい書いてるの？」

突然の質問に僕は思わず固まる。なんて言おうか、と悩みながら僕は口を開く。

「……短い小説なら何個か書いたことありますけど、そんな大層なものじゃないです」
聞こえるか聞こえないか微妙な声量で僕は呟いて、首を振った。
自分のことを話題にしてほしくない。
そう思って微妙な相槌を打って終わりかと思いきや、僕の予想に反して先生の質問は続く。
「俺、文章書けないから尊敬するなあ。どんな感じの小説書いてるの？」
「青春とか、そんな感じ、ですかね」
「なるほどねー。宇田川が思う『青春』ってなんだ？」
感慨深そうに先生は天井を見上げて、僕に青春の定義を求めてきた。そんなこと、自分で調べればいいのに。
「……みんなで遊んだりすることですかね。学校ではできないことをするというか。言葉にするのは難しいですけど、少しだけ世間が思う『当たり前』から外れたことをする、みたいな」
少しだけ目線を上げて答えると、先生は驚いた顔をしていた。先生がそんな顔をしていることを見たことが無くて不安になり、助けを求めるようにお父さんの顔を見ると、安心したような顔で僕と先生の顔を見ていた。二人の見たことのない顔に不安になる。
「いいこと言うなあ。そんな青春、先生したことないぞ」
腕を組んで再び天井を見上げる先生。どこか思い出に耽るような顔をして椅子にもたれ掛かった。
「さっきまで何もないって言ってたけど、やっていることがあって先生安心した。小説の方に進みたいのか就職したいのかもう一度お父さんと話してみてくれ」
僕にそう言った後、先生は椅子から立ち上がりお父さんに向かって「今日はありがとうございました」と言って礼をした。それに応えるかのようにお父さんも立ち上がり礼をした。
教室に出て先生がもう一度僕らにお礼を言って教室をあとにした時、お父さんが急に立ち止まった。
「この後は確か友達と帰るんだろ？」
少し寂しそうな声でお父さんは口にする。
「うん、昇降口のところで待ってる」

「……『やりたいことなんてない』って言ってたけど、本当はあるんじゃないか」
お父さんは嬉しそうに言ったけれど、僕はちっとも嬉しくなかった。その気持ちを表すかのように少しの間、沈黙の時間が流れる。
「……あれはあくまで趣味だから」
僕は首を振って昇降口に向かって歩き出した。
誰も僕のやりたいことなんて知りたくないし、応援したくない。先生だって「力になる」って言ってくれているけれど、あれは社交辞令だ。
姉と違ってやりたいことが見つかっていない僕に、そんなことをしても意味がない。きっとみんな心の中で僕の事を見下している。やりたいと提示したところで否定されるに決まってる。
「今日車で来たから、せっかくだから乗るか？」
気遣うようにお父さんは言った。僕は昇降口に友達と帰るから大丈夫と言うと、そうかと言って黙って昇降口の方へと歩き出した。スリッパが床に擦れる音だけが廊下に響く。
「もし、何かあれば相談に乗るから」
昇降口が近付いてきた時、再び立ち止まってお父さんは呟いて、靴を履き替えて車を止めてある駐車場へと向かった。たぶんそれも先生と同様、父親としての義務感みたいなものだ。僕は適当にうんと言って友達が待っている昇降口に向かう。壁に寄り掛かって進路の紙を眺めていた諒（りょう）はすぐに僕の存在に気が付いた。
「お疲れ。どうだった？」
「進路の話でどうもこうもないよ。いつものように時間が流れただけ」
心配そうに聞いてくる諒だったが、僕にとってはただの暇な時に話す相手だ。そんな深入りした話はしたくない。
僕はいつものように返した後、僕らは学校の最寄り駅に歩いて向かった。
「なんか翔って何に関しても無関心だよな」
学校を出て三分くらい経った頃、諒がポツリと呟いた。一歩前を歩く彼が振り向いて僕の顔を見る。
「何かやりたいこととかないの？」
面倒だと思った。暇をつぶす為の友人だったとしても、こんな帰る時まで進路の話はしたくない。

溜め息をつきそうになるも、何とか抑えてないよと先生と話したような口調で言う。
「やりたいこと見つけてたら親同伴で先生に呼び出しなんてされてないよ」
大きく息を吸って、でもそれがため息だとバレない様にゆっくりと息を吐き出す。
「そういえば今日来てたのお父さんだよね？」
思い出したかのように彼は空を見上げながら言った。僕らの頭上には青い空が広がっていて、夏だなと思う。僕は夏が嫌いだから、今すぐにでも冬になってほしいけれど。
「こういう大事な時って普通母親が来るもんじゃない？」
「……そうかな。小学生の時からお父さんが授業参観とか懇談会に来てたから、来ても今更って感じだけどね」
「なんというか、これは俺の考えだけど、自分のお腹から出てきた子どもだから如何なる時も成長を感じたいと思うけどね」
首を捻りながらよく分からないという顔をする。
「どうだろうね。僕より姉の方が優秀だから大事に育てたいんじゃない」
今度は何の躊躇いもなくため息をついた。
たぶんお母さんは僕の事が嫌いだ。嫌い、までいかなくても気に入ってないのは確かだ。何をするにも怜衣が優先で、弟の僕は後回し。何かある度に怜衣と比べて罵声を僕に浴びせる。苦しいし、悔しいし、言い返したい気持ちが比べられる度に込み上げてくる。でも怜衣が優秀なのは事実だし、僕が彼女と同じ技量を持っているとも思えない。だから、やり方は卑怯だけれど、ある意味正しいのだ。
地面に転がっていた少し大きめの石を蹴る。勢いよく蹴ったせいで電柱にぶつかり跳ね返ってくる。
「姉弟に優秀とかそんなのあるのかな」
よく分からないと首を捻りながら諒は星街（ほしまち）駅の改札をICカードで通る。この辺は田舎なので改札に人は居ない、無人駅だ。
僕も諒のあとに続いて改札を通り、向かい側に見える二番乗り場へと向かう。星街駅は一番乗り場と二番乗り場が向かい合わせで建っていて、向かい側に行きたければホームの横にある小さな道を通らなければならない。もちろん電車が来ればそこも踏切と同じように止まって待っておかなければならない。
二番乗り場について、地元に向かう電車を待つ。スマホで確認すると幸い電車はすぐに

来るらしい。
僕はポケットにスマホをしまって、向かい側で電車を待っている人達を眺める。
「翔は比べられて嫌じゃないの？」
横に立っていた諒が再び僕に話し掛ける。
「嫌だけど、そんなこと言ったら怒られるから」
「そうなんだ」
諒にしては素っ気ない反応だったけれど、長くこの話を続けたくなかったので受け流した。
前を向いた時、電車が来るアナウンスが鳴った。この辺の電車は基本的二両で、発車するときはエンジンがかかったような音がする。幼いときは車と同じようなエンジンがあるんだと本気で信じていた。
一段高くなっている出入り口に右足を置いて、電車の中に入る。この電車はなぜかいつも冷房が効きすぎている。
入って右隣にある五人分のロングシートに僕と諒は座る。そこがいつも電車に乗るときの定位置だった。
「そういえば諒は進路決まってるのになんでわざと未定って書いたの？」
進路相談を受ける前、事前に進路希望調査をクラスで行った。そこで諒は進路が決定しているのにわざと未定と書いて提出したのだ。その理由がよく分からず僕は質問する。
「それは友達に決まってるからだろ」
電車が発車したと同時に諒はそう言い、肩を組んできた。友達を象徴する様な諒の接し方を僕は嫌っていた。
やめてほしい、という意味を込めて組んでいる腕をそっと離した。
友達というものが僕には分からない。僕にとって諒は知り合いという括りの中に居て、友達という枠には入っていない。あくまで彼は暇なときに話す相手になる。
映画のように流れていく外の風景を眺めていると、彼は天井に目を向け「あっ」と声を出した。
「なんか暗いなって思ったら、蛍光灯切れてるじゃん」
天井を見上げたまま諒が呟く。確認するように天井を見上げると、確かに僕らが座っている蛍光灯一本だけ切れており、その真下だけ薄暗くなっていた。

「こんにちは」

突然僕らが座っている座席の前から女性の声が聞こえてきた。声をした方に目を向けると、ノースリーブの白いワンピースを着た、髪が肩まで伸びている女の子が僕の方を見て微笑んでいる。左目の下には小さなほくろがあった。

「こんにちは」

真正面に座っている女の子に対して僕は挨拶をして会釈する。すると女の子は再び「こんにちは」と言って微笑んだ。

「誰に言ってんの？」

それを見ていた諒が不思議そうな顔で僕を見つめている。

「いや、目の前に座っている女性が挨拶してきたから」

そう言いながら僕は女の子を指差す。

「……ふーん」

諒の顔が不思議そうな顔をしたまま、女の子が座っている椅子を眺めた。

僕も諒に倣って目の前に座ったままの女の子に目線を移す。相変わらず彼女は微笑んだままこちらを見ている。

星街駅に着くまで僕らは会話はしなかった。ただ流れる風景と僕と同じように向かい側の風景を見ている女の子を見ているだけで終わった。

電車を降りた時、彼女が座っていた席を見ると、彼女はそこに座ったままだった。

進路指導室に呼び出される日も終わり、僕も本格的な夏休みに入った。

田舎の夏はたぶん都会よりも暑い。風は吹くけど生温いし、周りに田んぼがあるせいでムシムシする。

部屋の窓から見える青空と入道雲を見て改めて夏だなと思う。こういう時は何か冷たいものが食べたい。確か冷蔵庫にアイスが入っていたはずだ。

曖昧な記憶を呼び起こしながら、重い体をあげ一階へと降りる。すると居間にはお母さんと姉の怜衣が座って実習先の病院を話していた。

確か、一週間後から怜衣は実習なんだっけ。

そう思いながら冷蔵庫を開けてブラックモンブランを取り出した時、「ちょっと翔」と不機嫌なお母さんの呼びかける声が聞こえた。「何？」

不機嫌そうな声で僕も返事をしてお母さんと怜衣が居る居間へと身体を向けると、お母さんが不機嫌そうな顔で僕を見ていた。冷蔵庫を足で閉める。

「あんたは進路決まってるの？」

お決まりのセリフだった。だいたいお母さんが怜衣と話している時は、僕にも話が回ってくる。そして僕を怜衣と比べる。

怜衣は昔から頭がよかった。小学生の時はオール五だったし、中学高校の時の成績も常に十位以内に入っていた。それに加えて運動神経もよくて、本当に非の打ちどころがない。

それに比べて僕はオール三がほとんどだったし、中学高校の成績も中の下くらいで目立ったところはない。そんな僕もお母さんは嫌っていた。そんなお母さんを僕も嫌っていた。

「まだ決まってないけど」

自分の部屋に戻ろうとすると、「怜衣はそんなんじゃなかったよ」と今度は呆れた声で言った。

「別に怜衣と比べなくてもいいじゃん」

「何言ってるの。同じ人のお腹の中で育って生まれてきて、なんでこうも出来が違うの」

大きくため息をつく。

「そんなの知らないよ。全員が同じ人じゃないんだから、違って当たり前じゃん」

今度は僕がため息をついて、階段に足を掛ける。

「でも大抵のことは似てるよね。姉弟なんだから」

今度は怜衣が冷めた声で呟いた。

それはまるであんたも頭がよかったらお母さんに愛されたのに、と言っているように聞こえた。そんなこと僕が一番分かっている。分かっているのに突っかかってくるのはお母さんたちの方じゃないか。

でも、そんなことを言える勇気は僕にはない。だって分かってもらえないことは分かっているし、分かったと言われたとしても十分後にはきっと忘れている。そんなことを言ったって意味はない。

二人で呆れている居間を通り過ぎて、僕は階段を上って部屋に戻った。透明な袋に入っていたブラックモンブランは溶けていて、少しだけ生温い味がした。

「ねえ、翔」

階段を上ってくる冷たく呆れたような声で僕の名前を呼ぶ。何？　と僕も冷めたような

声を出す。
「何もしないなら勉強でもしてこいってお母さんが言ってる」
「ああ、そう」
さっきと言っていることが矛盾している。勉強するなと言ったのはお母さんの方じゃないか。
僕はため息をついて立ち上がり、白色のトートバッグに筆箱と教材、ノートを入れて階段を降りる。居間を見ると、さっきと変わらずお母さんはテレビを見ていた。
「図書館で勉強してくる」
「そう」
見向きをせず、お母さんは呟く。
靴を履いて家を出る。するとすぐに真夏の太陽が照り付けた。改めて思う。夏は嫌いだ。
十分ほど歩いたころ、最寄り駅が見えてくる。切手を買ってホームに向かう。昼間で夏休みということもあり、人はまばらだ。
図書館は歩いても行ける距離にあるけれど、こんな暑い中十五分も歩いていたくないから、電車を使う。別に嫌いな子どもが家に居ないわけだから、電車で図書館に行っても文句はないだろう。
電車到着のアナウンスがホームに響き渡り、電車が到着する。電車に乗り、座席に座る。窓の外には田舎の街と田んぼ、青すぎる空にお城のような入道雲が貼りついている。
ふと、ふわりと優しい風が吹いた。誰かが物音を立てずにすっと僕の横を去っていくような、そよ風のような雰囲気。
気付けば横に、あの時出会った彼女が居た。
まさかいるとは思ってなかったので、僕は彼女を見つめる。彼女は不思議そうに僕を見ている。
「久しぶり」
そう言って彼女は微笑んだ。久しぶり、と僕もしぶしぶ返す。
「今日暑いよね」
「……そうだね」
確かこの子、初めて会った時もノースリーブのワンピースを着ていた。
服装に疑問を抱いていると、彼女は僕の横に座った。柔らかな花の香りがほのかに香る。

「君、名前はなんて言うの？」
「翔って言います」
「いい名前だね。苗字は？」
「宇田川です。宇田川、翔」
苗字を聞いた理由が分からなかったけれど、彼女は嬉しそうにそうなんだと言って、自分の名前がサキということを教えてくれた。
「呼びやすい呼び方でいいよ」
どうしよう、と悩んだ。でも初対面の人に呼び捨ては勇気いるし、第一相手は女の子だ。
「サキ……さんは苗字なんて言うの？」
悩んだ挙句、僕は彼女をさん付けで呼ぶことにした。
「苗字はフナバ。併せてフナバサキ」
「いい名前ですね」
「そう？　あ、タメ口でいいよ。君にだけ敬語使わせているのは申し訳ないし」
「……ありがとう」
この場面でありがとうと返すのは果たして合っているのかと考えていると、「翔くん」とサキさんが早速僕の名前を呼んだ。初めて女の子に名前で呼ばれた喜びと恥ずかしさが合わさってよく分からない感情になる。
「誕生日いつ？」
思いもよらない質問に僕はサキさんの顔を見て固まる。僕のその顔が可笑しかったのか、もう一度同じ説明をした。僕はやっとその意味が分かって口を開く。
「五月三日だけど」
そう僕が答えると、彼女は「幸せな日だね」と嬉しそうに言った。
「その日、何か特別な日なの？」
「まあ、そうだね」
サキさんは嬉しそうに笑う。
「翔くんはこの辺に住んでるの？」
「うん。さっき乗った星街駅が最寄り。サキさんは？」
「実は私も翔くんと一緒なんだよね」
一回引っ越したんだけど、またこっちに戻ってきたんだよねと懐かしそうに話す。それ

に僕はそうなんだ、と返す。左目の下にあるほくろが少しだけ動く。
「サキさんは学生なの？」
「ううん、働いてる。でも就職してすぐに辞めちゃったからニートっていうかもしれない」
鼻の下を触りながら恥ずかしそうにサキさんは下を向く。
「サキさん、もしかして年上？」
「うん、そうだよ」
「何歳？」
働く、ということは少なからず僕より上のはずだ。年齢を聞くと、彼女は二十一歳と答えた。
「……怜衣と同い年だ」
僕は思わず姉の名前を口にする。しまったと思った時はもう遅くて、「怜衣って誰？」と質問していた。
「僕の姉。三つ離れてる」
「なら、お姉さんと知り合いだったかもしれないね」
「確かに近所だしね」
そう言って笑った時、電車が一つ先の駅へと到着するアナウンスが流れた。
「ここで降りるの？」
「うん、歩いて十五分しかかからない距離の場所にあるからね」
「そうなんだ。勉強頑張ってね」
「うん、ありがとう」
そう言って電車を降りて改札を通る。
暑すぎる太陽の光と熱波を浴びながら駅から三分ほどの距離にある図書館へと向かった。図書館に入って窓際に設置されている長机の端に座る。昼という時間帯もあってか利用客は想像したよりも多く、ひとつ空けた椅子に大学生らしき男の人が参考書を開いて勉強をしていた。
その人に倣ってトートバッグから参考書を取り出し、勉強を始めようとするが、頭の中に浮かんだのは受験のことではなくサキさんのことだった。
お母さんに受験のために勉強してこいと言われ、それに従うように出てきたが、本当は勉強をする気はこれぽっちもない。まず進路が決まっていないのに勉強するという行為自

体がおかしいのだ。図書館についてやっとそのことに気付いて、どうして図書館まで来たんだろうと後悔する。

でもその代わり、彼女に会えた。この前も電車の中で会ったけれど、彼女はどうして電車の中に僕に会ったのだろう。でも彼女に会えるなら図書館に行くフリをして彼女に会いに行くのはどうだろう。だって進路が決まってないのに勉強するのは時間の無駄なような気がするからだ。それなら一期一会という言葉がある通り、彼女に会えた奇跡を噛み締めて彼女との仲を深めていく方が大切だ。

結局僕は図書館で勉強はせず、読みたかった本を何冊か持ってきて時間をつぶした。帰りはなんとなく電車に乗る気にならず歩いて家路についた。

夏休みに入って一週間が経った時、僕は図書館に行くふりをしてサキさんに会いに行く習慣が出来ていた。

「今日も図書館に行って勉強してくる」

居間でテレビを見ているお母さんに声を掛ける。お母さんは僕の顔も見ず声も出さず僕の言葉を無視する。いつもなら反応があってもいいんじゃないかと思うけれど、今週から怜衣が病院実習で家を空けているので、不機嫌な理由は察しがついた。家にいるのはお父さんと僕とお母さんの三人で、お母さんは僕とお父さんのことを嫌っている。それに加えてお父さんは平日仕事でいない為、僕と二人だけになる。

「行ってきます」

靴を履いてお母さんに言うけれど、相変わらず反応はない。

でも図書館で勉強するわけではないから無視してもいいんだけれど。

玄関のドアを開けると、相変わらず強すぎる日差しが降り注いできた。空も当然のように青い。

照りつける日差しから逃げるように向かったのは、コンビニのファミリーマートだった。

自動ドアが開くと、冷気が身体を包み込む。秋になるまでここに居たいと思いながら、僕はまっすぐにアイス売り場に向かった。コンビニもスーパーと同じくらい豊富な種類があって便利になったなと思う。

今日はどれにしようと迷い、結局いつもと買うブラックモンブランを手に持ち、レジに並ぼうとした時、サキさんの分も買っておいた方がいいんじゃないかと思った。最近は軽

く一時間話すときもあるし、彼女の分も買っていこうと、僕は二人分のブラックモンブランを持ってレジに行った。昼時にアイスを買ったので店員には不思議な顔をしていたけれど、二人で食べるので許してくださいと心の中で頭を下げながらビニール袋に入ったアイスを持って外に出た。夏は嫌いだけれど、気温が高い日にコンビニ立ち寄り、買ったものをレジ袋に入れて手にぶら下げながら歩くのは嫌いじゃない。

ファミリーマートの後に行き先は決まっていた。彼女が待つ駅の電車だ。

距離はそれほど遠くなく歩いて五分くらいで着くけれど、暑さのせいで体感は十五分くらいのように感じる。でも、彼女に会う為なら夏の暑さなんてどうでもいいようなことに思えてくる。好きな人に会いに行くならどんなに遠かったり疲れていたりしても会いに行くような、そんな感じだ。

彼女と知り合ったのはこんな風に日差しが照りつける暑い夏の日だったことを歩きながらふと思い出す。

小さな図書館のような外観をした駅に着いて切符を買って改札を通る。

二番ホームで立って待っていると、彼女が乗っているであろう電車が止まった。どの電車に乗っているかは分からないが、大抵彼女は車両が二両で人の乗車が少ない、二両目の車両のドアの入り口の横にある椅子のところに現れることが多い。

乗り換えの駅ということもあり、車両に乗っていた人が次々に降り、電車の中は誰も居なくなった。少しホームより高い位置にある電車の出入り口に右足を踏みしめて、車両の中に入る。中に入れば少し効きすぎている冷房が入っていた。ドアの横には車両側壁に沿って設置してある五人用のロングシートがあり、そのすぐ横には二人分の座席が向かい合わせになっているボックスシートが十個ほど設置されている。サキさんが出てくるのはボックスシートの横にあるロングシートだ。僕は定位置になっているロングシートの端に座り、暑さのせいで少しだけ結露したビニール袋を膝の上に置く。

「久しぶり」

聞き馴染みのある優しい声がした。顔を上げると目の前には白いノースリーブのワンピースを着たサキさんがそこに立っている。

「珍しいね、こんな真っ昼間にくるなんて」

嬉しいよ、と言いながら僕の左横に腰掛ける。

「夏休みだからね」

そう言いながら僕は結露しているアイスの袋を膝の上に置いてあるビニール袋の上に置く。
「あ、そのアイス！」
アイスの存在に気づいた途端、サキさんは子どもがはしゃぐような声を出した。
「どこで買ったの？」
「駅の近くのファミリーマートだけど……」
興味津々に聞くサキさんを初めて見て、戸惑った。
「もしかしてこのアイス好きなの？」
そう言うと彼女は目を輝かせながら頷いた。
「電車の中で食べるのは少し抵抗あるけど、一回くらいならいいかなって」
それにこの時間帯の電車は一時間くらいこの駅に停車しているはずだ。アイスを食べるだけなら、十分すぎるくらい時間がある。
「翔くんは優しいんだね」
そう言って彼女は微笑む。
「でも、私食べられないから二つとも食べていいよ」
「食べられない？」
予想外の出来事に思わず疑問の言葉が飛び出る。食べれないって、どういう意味だろう。
「もしかしていらなかった？」
不安になり、サキの顔を伺いながら尋ねる。
「いや、そういうわけじゃないんだけど」
なぜか少し困ったようにサキは右上に視線をやる。
「じゃあ食べたらいいじゃん。好きなんでしょ？」
「まあ、そうなんだけど、翔くん夏嫌いでしょ？」
「なんでそんなことわかるの？」
不思議に思って質問すると「そんなの見たらわかるよ」と言ってサキさんは笑った。
早くしないとせっかくのアイス溶けて食べれなくなっちゃうよ？　とさっきより水滴が増えているアイスを指差しながらサキさんは再び笑う。
悶々としながらわかったと僕は彼女にアイスを食べさせるのを諦め、結露している水色の袋を縦に開けてアイスを取り出す。

結露が思ったより早かったから形が崩れているのではないかと心配したけれど、多少雫が垂れているだけで思ったより溶けてはなかった。
持ち手の棒から伝わってくるアイスの冷たさを感じながら、アイスを口に運ぶ。口の中でシャリシャリとアイスが砕ける音がし、五回ほど噛むとアイスは個体から液体へと変化した。冷たいソーダ味の液体が喉を通っていく。
「美味しい？」
サキが羨ましそうに僕の顔を覗き込む。
「うん。シンプルイズベストって感じ」
「なにそれ。私が求めてた感想と違う」
ケラケラ笑いながら僕を指差すサキ。その笑顔、昔どこかで見たことあるような気がする。気がするだけだけれど。
「私も食べたかったなあ」
二個目のアイスを食べ終わり、頭がキーンとするアイスクリーム頭痛に苦しみながら頭を抱えているとサキが思い出に耽るような声で呟いた。
「なら、食べればよかったじゃん」
食べる前と同じような会話をしているなと思いながら僕は口を開く。
「でも翔くんに食べさせてあげてよかったかも」
アイスクリーム頭痛が治まり体を起こしサキの顔を見ると、一瞬だけ目が合いサキは前を向いて車両の外にあるホームのベンチを眺めた。
「意外とアイスを連続で食べるの弱いんだなって思って。それに頭を抱えている翔くんが面白かったし」
そう言って再びケラケラと笑いながらサキは僕を指差す。指差すのはもしかしたら彼女の癖なのかもしれない。そんなことを思いながら、食べ終わったアイスのゴミが入ったビニール袋の持ち手を結び「なにそれ」と笑う。
「でもアイスを私の為に買って来てくれたのは嬉しかったよ。ありがとう」
笑いながら言う彼女の顔と言葉に、少し心臓が跳ね上がった気がした。そんなことはない、という意味を込めて僕は首を振って立ち上がる。
「また来てね」
「うん」

彼女の言葉を背に僕は電車を降りる。スマホを見るとちょうど一時間経っていた。
僕が電車の前で振り返るとちょうど電車のドアが閉まり、発車していった。
彼女の姿は窓の反射のせいでよく見えなかったけれど、空はさっきより青く澄んでいるような気がした。
翌日の空は昨日の青空が嘘かのように曇っていた。雨が降りそうだけれど、これが雨雲じゃなければいいなと思いながらいつもの道、改札を通って電車に乗って彼女に会いに行く。
「今日も来たんだね。会いに来てくれて嬉しいよ」
いつもと同じように嬉しそうに微笑んでサキさんは僕の横に座った。
エンジンのような音が聞こえた後、ゆっくりと車両が動き出し、映画のワンシーンのように風景が流れていく。同じような景色なのに、じっと見ていられる。
すごいと言わんばかりの顔をしてサキは褒める。そんなに偉いことだろうか。今年受験だからね、ということを付け加えると、何か将来の夢は決まってるの？　と聞いてきた。
「小説家だけど、周りは賛成してない」
「そうなんだ」
今度は感心するようにサキは声を出した。
「なんで小説家になろうと思ったの？」
「なんでって……」
思わず言葉に詰まった。僕の親は小説家になることを賛成していないからだ。
それを少し心が開いている相手に言えるような勇気はなかった。
少しの間黙っている僕を不思議に思ったのか彼女は「何か言えない理由でもあるの？」と不思議そうな顔で聞いてきた。
その質問は図星でなんて言えばいいかさらに悩んでいると、「空想の世界が大好きだった、とか？」と聞いてきた。僕は小さく頷く。
「ならそうだって言ってくれればいいのに」
「……親がこの夢に賛成しなくて」
小さく僕が呟くと、サキさんは考えるように目をそらして、「親のせいにするの？」と僕の目を真っ直ぐに見て言った。
「だって親が賛成しないと夢って叶えられないじゃん」

「でも夢は自分で見つけてやりたいって言うものだよ」
「見つけてるけど、親が賛成しなかったったら意味ないじゃん」
「いつまでも翔くんは親に縋って生きていくの？」
彼女が言った言葉に確信をつかれた気がして僕は黙った。サキさんが言う言葉は筋が通っている。
「そんなところで何してるんですか」
電車の外から女の子の声が聞こえた。その方向を見ると、白いブラウスに紺色のスカートを履いた髪を肩まで伸ばした女の子が立っていた。
突然の声掛けに僕は思わず固まる。それはサキさんも同じだったらしく、女の子をじっと見つめている。
「……何してるって、話してるんだよ」
制服を見る限り、彼女は同じ高校の生徒なのは間違いない。同級生で僕に突っかかってくる女子はいないので、たぶん彼女は後輩だ。
そう予想を立てて彼女に話し掛けると彼女はため息をついて、僕の目をじっと見つめた。
「先輩が見ているのは幽霊です。隣には誰も居ません」
何を言っているのか分からず、僕は再び固まった。
彼女が幽霊なはずがない。だって僕の目に見えているのだから。
「そんなわけないじゃん。サキさんは僕の横に居る」
「居ないです」
「なんでそう言い切れるの？」
自分の前に居る人を居ないと言われたことに対して腹が立っていた。僕は出来るだけ怒りの感情を外に出さないように深呼吸をして女の子の言葉を待つ。
「私達には見えてないからです」
そんなわけない、という意味を込めて僕は大きくため息をついた。それを見て彼女もため息をつく。
後輩にそんなことを言われ、悶々とした気持ちが胸の中に広がっていた。なんで後輩に、名前も知らない人にそんなこと言われないといけないんだ。
長い沈黙が途切れることはなく、後輩と名乗る女の子は大きくため息をついて階段方向に向かっていった。

僕はサキさんと話そうと思う気にはならず、「ごめんだけど、帰るね」と言って電車から降りて改札へと向かう。

外はまだ明るかったけれど、家に帰る気にはなれなかった。第一後輩と名乗る女の子からそんなこと聞きたくなかった。何を根拠に言っているのか僕は理解が出来なかった。歩く気力がなくなるまで歩き続けて、家に着いたのは門限をとっくに過ぎた夜の七時だった。

「翔、あんた今何時だと思ってるの？」

玄関のドアを開けるなり、お母さんの怒鳴り声が聞こえてきた。お母さんの質問に答えずにいると「怜衣はそんなんじゃなかった」といつものように姉と比べ始めた。

ふと玄関の靴を見るとお父さんの使い古された革靴が置いてあった。つまりこの家にお父さんはいる。しかしお父さんは威圧的なお母さんのせいで常に怯えながら過ごしている。お父さんがお母さんに反抗しているところを見たことがない。

「なんでこうも出来が違うの」

お母さんはいつもの決まり文句という名の罵声を僕に浴びせてきた。その言葉でどれだけ僕が傷付いたか知らないくせに。

それでも反抗する勇気がない僕は黙って自室に繋がっている階段を上がろうとすると、勢いよく玄関を開ける音が聞こえた。振り返るとそこには息を切らした怜衣が立っていた。

確か怜衣は実習に行っているはずだ。なんでここに居るのだろうか。

心配して彼女を見ているとお母さんが台所から「どうしたの？」と心配そうに怜衣の顔を覗き込んだ。

「……お母さん、沙樹（さき）が」

怜衣の声は震えていた。今にも泣きそうな声をしている。

「サキがどうしたの？」

途中で切れた言葉をお母さんが続けようとしている。胸がざわざわとざわめく。悪い予感がする。

「沙樹が、死んでたの」

その言葉に僕は理解が出来ずに固まってしまった。

二章

『サキ』という人物が誰なのか、という疑問が湧いてきた。もし死んでいるのだとしたら、後輩のあの子が言うように幽霊なのかもしれない。でも、同姓同名っていう可能性もある。

そんな不安をよそにお母さんは怜衣を居間へと連れていき、サイドテーブルへと座らせる。真正面に座った彼女の髪はぼさぼさに乱れていて呼吸も肩で大きく吸っていてまだ落ち着いてないようだった。

「サキちゃんって誰なの？」

お母さんが優しく怜衣に問いかける。怜衣に話す声は僕の時と違ってどこか包容力がある。そんなひねくれた愛情は誰譲りなんだろうとご飯を食べながら思う。

「入退院を繰り返してた沙樹だよ。でも見舞いに行かせてもらえなくて、でも何も言わずに私達は卒業したから生きてたんだってずっと思ってた」

彼女の頬に涙が流れる。

「まさか死んでいたなんて思ってもなかったんだよ」

その言葉は苦しそうだった。そんな怜衣の姿を僕は初めて見た。お母さんもそうだったのか混乱したように、でも彼女が取り乱さないように優しく背中を撫でている。

「……そのサキさんっていう子って」

静寂に包まれた居間で僕は怜衣に向かって小さく質問をした。そうじゃなくてもいい。でもこれは確かめた方がいいと、直感的に思った。彼女は何も言わず赤く腫れた目だけを僕に向ける。

「左下の目にほくろがあったりした？」

当たっていたのか彼女は一瞬だけ目を大きく見開いた。そして小さく頷く。

「髪が肩までの長さで、ブラックモンブランが好きで、フナバっていう苗字だった？」

サキさんの特徴を挙げると、彼女は静かに黙って小さく頷いた。その瞬間、僕が知っている『サキ』と怜衣が言う『沙樹』が同一人物ということが分かった。

「……僕、サキさんに会ったことあるよ」

突然の告白に怜衣もお母さんも驚いた様子だった。顔を見合わせて、不思議そうに僕を見た。お母さんも何も言わず黙って見ている。

「それって、どこで？」

悲しそうな、でもどこか暗闇の中で一筋の光を探すようなそんなか細い声だった。
「進路懇談会が終わった後の帰りの電車で、ノースリーブの白いスカートを履いた女の子が僕に話し掛けてきたんだよ」
僕は彼女に会った経緯をゆっくりと、正確に話した。
「明るくて、きしゃで、一緒に話していて楽しかった。最近帰りが遅かったのもサキさんと話していたから」
それを聞いたお母さんが申し訳なさそうに俯いた。お母さんが僕にそんな顔をするのは初めてで、少しだけ嬉しくなった。怜衣と対等に扱ってくれているのだろうと思った。
「でもその子は私が言っている『沙樹』ではないんでしょう？」
「僕も聞いた時はそう思った。でも、今日の夕方、後輩の女の子が僕に『先輩が話している子は私達には見えません』って」
「その証拠はどこにあるの？　翔には見えてるんでしょう？」
「だから明日確かめに行くんだよ」
「そう」
お母さんはそれっきり僕に対して言葉を発することはなかった。代わりに怜衣に対して口を開いた。
「実習はどうしたの？　あと一週間はあるはずだけど」
「先生に嘘ついて戻ってきた」
「どうしてそんな亡くなったことが分かるの？」
「過去に入院された患者さんの記録を見ていたの。そしたら沙樹の名前があって確認したら亡くなっていることが分かって」
「そう」
そう言ってお母さんは静かに台所に戻っていった。
次の日、僕はサキさんに会いに行くために星街駅に向かった。空は昨日から曇っていて今日は昨日より厚い雲が覆っているような感じがする。雨が降らないように祈りながら、僕は速足でホームに向かう。一番ホームに電車が止まっていてその電車に乗る。電車の中は人がそれほど多くなく、二両は数人が乗っているだけだった。
僕はいつもの席に座ってサキさんが現れるのを待つ。しかし五分経っても彼女が現れる気配はなかった。もしかすると乗り換えの駅なら出ると思い乗り換えて東寺駅まで向かう。

そこではあの時と同じように数時間止まっているだろうから、彼女が現れていたのかもしれない。僕は電車が止まっても降りることはなく、ずっと彼女を待っていた。彼女の真相を僕は聞きたかった。

でも、彼女は現れなかった。どうしてか分からなかった。喧嘩をしたわけじゃないし、彼女が嫌がることをしたわけじゃない。

諦めて席を立とうとした時、前から女の人の声が聞こえた。その方を見ると後輩と名乗っていた女の子がホームに立って電車の中を覗き込んでいる。

「彼女を待っているんですか」

彼女がサキさんのことを指していることはすぐに分かった。僕は頷く。もしかして彼女のことを何か知っているのだろうか。

「もしかして現れなかったり？」

どうしてそれが分かったのか僕は不思議だったけれど、図星だった僕は再び頷く。

「本人が現れないなら直接確かめに行きましょうよ」

彼女は少し自慢げに言って僕の前に手を差し出した。僕は彼女の手を握って立ち上がり、電車を降りた。この駅は学校の最寄り駅だが、もしかして学校に彼女を知るヒントがあるというのだろうか。

黙って駅の改札を出た彼女の後ろ姿を見ていると、急に立ち止まって僕の右横に来て並んで歩きだした。そして僕らの間にあった小さな沈黙を破った。

「なんで出てきたんだろうって思ってますよね、先輩」

「……まあそうなんだけど」

歯切れが悪そうに言うと、僕は彼女に対する疑問を投げかけた。

「君、名前なんて言うの？」

「蓬原創美（よもぎはらつくみ）って言います」

「そうなんだ」

そう相槌を打って、前を向く。苗字が三文字の人に言われたくないだろうが、変わった名前だ。

「蓬原さんはなんで僕の事知ってるの？」

「詳しくは言えないですけど、電車の中でひとり話しているところを見たからですかね」

「それは話し掛けてきた時？」

「いや、違いますね」
「じゃあ何なの？」
「んー、わたし部活が写真部で夏休みはどこかしらの街を撮りに行ってるんですけど、その時に先輩の声が聞こえて、声を掛けたっていう感じですかね」
知る方法としては証拠不十分のような気がしたが、僕は「そうなんだ」と言った。
「写真部って具体的にどんなもの撮ってるの？」
この高校に写真部があることは知っていたし、全校集会でたまに賞を取っていることは知っていたけれど、具体的にどんなものを取っているのかは知らない。
「風景と人物に解れているんですけど、だいたい風景を撮りますね。だいたい人物の方が賞に入りやすいですけど私は風景の方が好きです」
「じゃあカメラって持ってるの？」
「そうですね。一眼レフ持ってます」
すごいね、と言った時、ちょうど高校が見えてきた。
「高校に来たのはいいけど、誰かサキさんのことを知ってる人は居るの？」
「さあ、どうでしょう」
何か企むように振り返って靴を脱いで四階の空き教室に連れていかれた。そこに人はおらず、代わりに本棚が壁に並んである。
「ここが写真部の部室なんですけど」
そう彼女は前置きしてこの冊子を見てくださいとノートを開いて僕に渡してきた。そこには誰も居ない教室の写真が何枚も貼ってあった。
「写真部は撮った日に写真を現像して貼るという決まりがあるんですけど、彼女の写真はなぜか学校の風景ばかりです」
何枚もめくってみるけれど、そこには確かに窓際に飾られた花の写真や誰も居ない教室をそれっぽく懐かしい感じで撮っていた。
「それと撮った日にちを見てみてください」
そう言って彼女は僕に撮った日にちを見るように促した。そこには五月三日、九月三日、一月九日、二月一日、二月十九日、三月一日、三月二十一日と年が明けてから写真を撮るようになっている。次の年度も同じ日にちで九月三日まで記録があるがそれ以降の写真がない。

「この決まった日にちに違和感を持ったんです。それでわたしこの数字が何を意味するのか調べてみたんですけど」
彼女は少しだけ間を開けて口を開いた。
「数字の語呂合わせだったんです」
訳が分からず僕は固まった。確かに何か意味がありそうだけれど、それがどう語呂合わせと繋がるのだろう。
「よく見るとこれらは五、三、九、一、二と同じ数字が全部に使われています」
「これらの数字を語呂に合わせて並べてみたんです」
「そしたらなんて出てきたの？」
「五、三、二、一、九、三、一で『うみにいきたい』だったんです」
その時、彼女がなぜ僕の誕生日が幸せな日と言った理由が分かった。彼女はこの数字を使って小さなメッセージを残していたのだ。
「そして彼女がなぜ学校の風景ばかり撮っていたのか、理由は多嶋先生が知っています」
「どうして？」
どうしてそこで多嶋先生が出てくるのだろう。その意味がよく分からなかった。
「ついて来てください」
そう言って彼女が連れてきたのは職員室だった。職員室に向かった。僕は彼女の後ろをついて行く。
「一年の蓬原です。多嶋先生はいらっしゃいますか」
彼女の応答に多嶋先生はすぐに反応を示し、僕らの顔を見るなり驚いた顔をした。
「宇田川じゃないか。どうしたんだ？」
近寄ってくるなり先生は疑問の声を投げられた。僕が言い淀んでいると彼女は「ちょっとサキさんことで話したいことがあって」と助け舟を出してくれた。それに先生はすぐに納得したようだった。
僕らは職員室の横にある校長室に案内された。校長室に入るのは初めてで妙な緊張感があった。奥に校長先生が座っているが僕らには気づいてないようだ。
「沙樹さんの卒業アルバムを見せて欲しいんです」
そう彼女がお願いすると多嶋先生は平成三十年度のアルバムを僕に手渡してきた。クラス写真のページを開くと、そこには校舎の前で集まって映っているクラスメイトと多嶋先

生の姿があった。
「沙樹さんの苗字は舟場（ふなば）って言うんだけど、舟場さんは入学した当初からずっと入退院していたからよく覚えてるよ」
静かに多嶋先生は沙樹さんのことについて話し始めた。横に立っている創美も静かに聞いている。
「彼女は皆のように授業を受けて帰るっていうことが出来なかったから辛いはずだったのに、学校に来たら明るくみんなと接して本当に楽しそうだった」
当時のことを思い出しているのか、多嶋先生の目は潤んでいた。
「部活も積極的に参加して、本当に楽しそうだった」
「その部活についての質問なんですけど」
僕がそう言うと先生は何も言わず僕の顔を見た。
「さっき蓬原さんの方から写真部だったことを聞いて、沙樹さんが撮っていた写真を見させてもらったんですけど、どうして彼女は学校内の写真しか撮ってないんでしょうか」
質問するにはあまりにも愚問だと思った。いくら担任であったとしても彼女がどうしてその行動を起こしたのかは分かるはずはない。言った後に後悔したけれど、先生はしっかりと僕の目を見つめたまま答えてくれた。
「彼女は外に出ることが出来なかったんだよ」
「それはどうしてですか？」
「彼女はありのままの日常を撮りたかったんだと思う。彼女にとっての日常を残したかったんだと思う」
彼女はきっとどこにも行けない惨めさを、せめて形に残そうと『写真を撮る』という方法で自分が生きた証を残した。それはきっと彼女にとってすごく惨めな事だっただろう。
「海に行きたいとは言ってませんでしたか」
「お見舞いに行ったときに一度だけ。すごく悲しそうな目をしてた」
「そうなんですか」
「そういえば、多嶋先生と一緒に姉の怜衣も映ってますが、知らせなかったんですか」
「知らせようと思ったんだけど、二人が仲いいことは知っていたからよりショックを受けると思って伝えなかったんだよ」
僕は言葉が出なかった。知らせて欲しい、と思ったけれど、仲が良いのに亡くなったこ

とを知ったら苦しくなるに決まっている。最善、とまでは行かなくても先生の判断は間違ってなかったと思う。

創美と東寺駅で別れて電車に乗って座席に座った時、人影が見えた。沙樹さんと思って思わず立ち上がったが、そこに立っていたのは彼女ではなく諒だった。

僕はなぜ彼がこんなところに居るのかが分からず、立ち尽くす。その姿が不思議に思ったのか諒は僕の顔を見ながら静かに見つめた。その眼は冷めていた。

「なんでこんなところに居るの？」

「それはこっちのセリフ」

諒の声は明らかに冷たく、怒っていた。

「こんなことして何になるの」

「何ってどういうことだよ」

彼の言っている意味が解らず、僕は苛立ちを覚えた。周りには人が居るからできるだけ声のトーンを落として話す。

「あいつのことだよ。ずっと話してただろ」

あいつが沙樹さんのことを指していることはすぐに分かった。あいつ呼ばわりに激しい怒りを覚えたが何とか冷静だと保つ。

「あいつは周りの人には見えない幽霊。そんな奴の為に何をしようとしてるの」

「最初は幽霊だっていうことを知らなかったけど、さっき彼女の話を聞いて成仏させたいって思ったんだよ」

そう言うと彼は深い溜め息をついて「お前さ」と言った。彼が誰かにお前と言う時は確実に怒っている。

「周りの人に見えない人のことを心配するより自分の心配したらどうなの？」

反抗する言葉が出てこなくて、僕は黙り込む。

「いつも何に関しても無関心なくせに、大切なものが出来た時だけそれに縋って、何を求めてるわけ？」

彼の大きな声に何事かと電車に乗っている人達は僕らを見ている。でもそんなこと今の彼には関係なかった。

「お前のそういうところ嫌い」

反射的に胸ぐらを掴もうと思った。でもここは電車の中で、大事にはしたくない。大きく息を吸って怒りを抑える。

彼は星街駅に着くと大きなため息をついて僕を睨みつけた後ホームに降りて改札へと向かった。

その後ろ姿が遠く感じて僕は彼のあとをついて行くことが出来なかった。

家に帰るとお母さんがいつものように台所で料理を作っていた。こういう時って親は何か察してくれるんだろうけど、威圧的な性格のお母さんがそんなことをするとは思えない。

僕はお母さんに何も言わず二階に上がり、怜衣の部屋に向かった。彼女はあの日から実習に行ってこの前帰ってきた。

「沙樹さんのことなんだけど」

そう言いながら怜衣の部屋のドアを開ける。彼女は勉強していた手を止め僕の方を見た。

「何か分かった？」

怜衣は僕を部屋に入るよう手招きし、僕はテーブルがあるところに座る。向かい側に怜衣が座る。

そこで彼女が写真部だったこと、海に行きたがっていたこと、亡くなったことを黙っていたことを話した。

「……そっか」

怜衣が放った言葉はそれだけだった。きっとその言葉に悲しみも後悔も含まれているのだろう。

「……聞きに行ってくれてありがとう」

長い沈黙の後、怜衣は俯きながら言った。僕はうん、と頷いて部屋を出た。

翌日から僕は部屋から出るのをやめた。原因は沙樹さんと諒の喧嘩の二つにあった。

仮に沙樹さんが帰りに姿を現したなら、そこで問題は解決していた。でも現れたのは諒で、人生で初めての喧嘩をした。波風立てず生きてきた僕にとって、解決の方法が分からなかった。

どうしていいか分からず、部屋に閉じこもっていると部屋をノックする音が聞こえた。はい、と返事をするとお父さんが入ってきた。

「最近、怜衣とよく話すところをよく見るけど、何かあったのか」

お父さんは家族の中で商況的な立ち位置に居る。もともと何かを言う人ではないし、どちらかというと僕に似ている。
「何があったにしろ、子どもが仲良くしているところを見ると俺達親も嬉しくなる」
一呼吸おいてお父さんは再び口を開いた。
「これは怜衣から聞いたことなんだけどな、昔沙樹という仲のいい友達が居たらしく、その子がよくお前のことを話していたらしいんだよ」
「僕の事を？」
どうして僕の話をしているのだろう。僕は沙樹さんにあったことないのに。
「沙樹さんが中学二年生の時、花火を見るために河川敷で行われている祭りに行ったそうなんだよ。そこで河川敷でひとりで座っている男の子が居て、すごく熱心に自分の夢を話したんだって」
少し声を震わせながらお父さんは続ける。
「その男の子、誰だったと思う？」
そう言ったけれど、僕には見当がつかなかった。僕は首を振る。
「翔だったんだよ」
予想だにしない答えに思わずお父さんの顔を見る。お父さんの目は真っ直ぐに僕を見ていて、嘘はなかった。
「沙樹さんと会った時、ちょうど夏祭りが行われていたらしいんだ。河川敷に何もしないで座っている翔を見て話し掛けたら怜衣の弟っていうことが分かって、すごいと思ったらしいんだ」
脳裏に一瞬だけ女の子の横顔が映し出された。そしてあの日、僕は彼女に向けて手紙を書いたことを思い出した。小さい頃に密かに作って貯めていた大切な箱を引っ張り出す。そこに水色の封筒に入った手紙を見つけた。そこには大きな字でこう記されていた。

サキちゃん。サキさん。
なんて呼んだらいいのかな。君はぼくより年上だったから本来ならさん付けするべきかな。あの場所で一度も君の名前を呼ばなかったから、もしかしたら今ここでさん付けで呼んだから笑うかもしれない。
あ、えっと、なんでこの手紙を今書いているのかというと、ぼくはサキさんにあこがれ

を持ったからです。小学生の僕にとって中学生は手の届かない場所にいるというか、永遠に追いつかない場所にいるというか、そんな感じがしました。言葉にするにはあいまいとしてるけど、本当にそう感じたんです。

好きなものがあるの？　とサキさんが質問して読書とぼくが答えた時、すごいねって言ってくれてすごくうれしかったです。ぼくの親は、正確に言うとお母さんなんだけど、あまり読書することに賛成してないから。なんだか心が温かくなりました。あ、でも謝らなきゃいけないこともあって、こんなこと言うと笑われそうだけど、尊敬の意味が僕まだよくわかってなくて「ありがとう」って返してしまいました。辞書で調べると『その人の人格を尊いものと認めて敬うこと』と書いてあったんだけど、やっぱり意味はよく分かりませんでした。いつか分かる日がくるのかな。

何かほかにも書こうと思ってたんだけど、なんだったっけ。あ、思い出したけど、こんなこと女の子に対して書いていいのかな。でも書かないと忘れちゃいそうだから書きます。これを読んだ時、怒らないでください。

サキさんの左目の下にあったほくろ、きれいでした。ほくろにきれいなんてあるかって思われるかもしれないけど、大人びたサキさんには似合いすぎていました。えっと、言葉にするにはむずかしいんだけど、大人に見えるサキさんをより大人にさせているというか。……さっきと書いてること変わらないか。でも、きれいだったのは本当です。

あと、もうひとつだけサキさんに伝えたいことがあって（いったい何個あるんだってツッコんでください）名前を言った時に上がった花火に照らされた時のサキさんの横顔、言葉にならないほど美しかったです。それが最初に書いたあこがれにつながっているんじゃないかって思います。

サキさんがなんであの河川じきにいたのかわからないけど（たぶん、ヨーヨー持ってたから夏祭りに来たんだと思います。まちがっていたらごめんなさい）僕に話しかけてくれてありがとうございました。僕はあの河川じきで空をながめるのが習かんになっていて、今日も見に来たんです。そしたら夏祭りがあっていて、少しびっくりしました。濃い青色とオレンジ色に染まる空はとてもきれいなので、サキさんもつらくなったら空を見てみてください。きっと、いやなことを忘れられると思います。あと、それを映す川や海も反射してきれいです。

最初の方、なんて呼んだらいいかわからなくて君って書いているけど、後半はサキさん

と呼んでいるので許してください。サキさんが僕のことを覚えているかはわからないけど、僕にとって今日の出来事は一生の思い出です。またいつかサキさんに会えた時、この気持ちを伝えさせてください。その時には今よりたくさんの本を読んでサキさんをおどろかせたいなって思います。サキさんはずっとぼくのあこがれです。

小学六年生　うたかわ　かける　より

読書が好きと言った時、彼女は「私をモデルに小説を書いてよ」と言った。自信がなかった僕は一瞬躊躇したけれど、あの空が僕は好きだったから書くことを決意して、彼女の名前を聞いた。その瞬間花火が鳴って薄暗くてよく見えなかった彼女の顔が花火によって映し出された。その時の彼女の顔がとてつもなく美しくて、僕はあの時抱いた感情を言葉にしたいと思って、小説を書き始めた。でもその熱意は大きくなるにつれ薄れていってしまい、いつしか消えてしまった。まるで最初から沙樹という人物が存在していないかのように。そして、七年の時を経て彼女は僕の前に現れて、海に行きたいというメッセージを残した。

今度は僕が彼女の願いを叶える番だ。

「でも、なんでお父さんがそれを伝えるの？」

怜衣自身が聞いているなら、直接僕に話せばいいのに。

そう思いながらお父さんに尋ねると、いやと言いながら何かを隠すように頭を掻いた。

「実は翔が落ち込んでいるのも怜衣から聞いて、心配だから声掛けたんだよ。なんか直接話すのは恥ずかしいみたい」

「なにそれ」

僕はおかしくなって笑った。その僕の姿を見てお父さんも笑う。

てっきり怜衣も冷たかったから僕の事はどうでもいいのかと思っていたけれど、そうでもないことに気が付いて、少しだけ安心した。

「ちょっと沙樹さんのところに行ってくるよ」

そう言って立ち上がるとお父さんは「気を付けて」と言った。

手紙を持ったまま家を出て、星街駅に向かった。途中、創美に会った。僕はそこで写真部で提出する写真を探している、という彼女にあるお願いをした。

創美と別れた後、空を見上げると雲の切れ間から青空が見えた。灰色に囲まれた青がい

つも見ている青より綺麗な気がして、僕は走った。この気持ちを早く沙樹さんに伝えたかった。

改札を通り、ホームに向かうといつものように電車が止まっていた。呼吸を整えて電車に乗り、いつもの席に座るとすっと優しい香りが鼻腔を刺激した。顔を上げると、沙樹さんが立っていた。

「分かったんだね。私が誰なのか」

その声は少しだけ悲しそうだった。僕は頷く。

「沙樹さんが幽霊だって聞いた時は驚いたよ。でも過去を知っていくうちに僕が小説家を目指そうと思ったきっかけも思い出して、今度は僕が沙樹さんの願いを叶える番だって思った」

そして手に持っていた手紙を渡す。彼女は驚いた顔をして封を開け、中身を読んだ。

「海、見に行こう」

そう言って僕らは少し離れた街の海へと続く電車を待った。

サキさんは周りの人には見えない。それが幽霊だということを意味することは解っていた。でも彼女は僕の前に確かに存在していた。そんな彼女に縋るのは、きっと僕は彼女に依存していたんだと思う。

僕と彼女の前にはエメラルドグリーンの海と澄み切った青空が広がっている。それは車両という空間に縛られた彼女がずっと待ち望んでいた風景だった。

「綺麗だね」

横にいるサキが嬉しそうに呟く。爽やかな風に吹かれ、短い髪と白いワンピースが緩やかに靡いていた。それさえも美しく思えて、僕は自然と笑顔になる。

「ずっと、この景色を見たかった」

今までの出来事を思い出すような優しい声でサキさんは言った。

「この海を見るのが翔くんでよかったよ」

そう言って彼女は海を見ながら微笑んだ。

「もしこの景色を見るのが翔くんじゃなければ、私もしかしたら死んでたかもしれない」

大きく息を吸い込むと、サキさんは一歩ずつ砂浜に足跡をつけるようにゆっくりと歩き出した。僕もそのあとに続く。

既に亡くなっている人が死んでいるという言葉を使うと、なんだかそれは逆に死んでい

る者も生きているような錯覚に陥って、不思議な感覚になる。でもそんなことはないと、笑いが込み上げてくる。

「もう君はこの世にはいないのに、もう一度死ぬなんてありえないよ」

「確かにそうかもしれない」

数歩先を歩くサキさんに追いついて顔を覗き込むと、彼女は何かを思い出すような優しい顔をして笑っていた。でもそのあとすぐに「死んでないから地縛霊になってるんじゃない？」と思い出したかのように口にした。僕は彼女の言う通りだと思って「確かにそうかも」と、ついさっき彼女が言った言葉を繰り返していることに言った後に気が付いた。

そのことにサキさんも気づいたのか、彼女の顔を見るとすぐに目が合った。そしてその瞬間が面白くて僕らは声を出して笑い合った。

「なんで翔くん私と同じこと言うの」

「だって、僕もそう思ったから」

「そんなこと言われなくても知ってる」

「なにそれ」

波打ち際まで来たところでサキは足を止めて、手を後ろに組んで再び笑った。

「水、冷たいね」

そう呟いた彼女の声は少しだけ寂しそうだった。

「僕はずっと、君に憧れてた」

水に打たれながら、彼女はじっと自分の足を見ている。

「出会ったあの日、僕は花火に照らされた君の横顔が綺麗だと思った。そしてそれと同時に強い憧れを抱いた」

一度深く深呼吸して、再び僕は口を開く。

「きっと僕はその時から君を言葉にしたかった。思い出で終わらせたくなかったんだと思う」

そう言ってサキさんの顔を見る。彼女も僕の顔を見ていて自然と目が合う。そして笑う。

「私って、そんなにすごかったんだね」

その言葉の意味がよく分からなかった。でも、彼女は嬉しそうに微笑んだ。きっと彼女も僕の存在は大きかったんだと思う。

青春なんて言葉があるけれど、それは一部の限られた人生を謳歌したい人達が使う言葉

だと思っていた。
でも僕が体験したこの出来事も立派な青春だと、今なら胸を張って言える。
「絶対に君を言葉にするから。思い出だけで終わらせない」
それは彼女に送る最後の言葉でもあったし、自分への決意の言葉でもあった。
「楽しみにしてるね。翔くんの小説」
そう言いながら海を眺める彼女の横顔は、あの日と同じように言葉がいらないほど美しかった。

夏休みが明けた。家族の仲は相変わらず悪かったけれど、お父さんとはあの日を境に少しずつ会話をするようになった。

学校に行くと、喧嘩をしていた諒から言い過ぎた、と謝られた。僕はそこまで彼に対して怒ってなかったので許すとありがとうと教室居るにも関わらず、人目もはばからずにハグをしてきた。やっぱり彼がたまにとる友達を象徴する様な行動は好きではない。でも、どこか懐かしかった。

沙樹さんは海を見た次の日から現れなくなった。寂しかったけれど、それは彼女が無事成仏したことを意味していた。

だから僕は彼女の願いを叶える為、小説を書いた。あの時の感情を、出来事を言葉にした。

タイトルはさっき彼女が撮った写真を見て思いついた。実は手紙を渡す途中に創美に会った時、僕らが海に行ったときの写真を撮るようにお願いしたのだ。その写真の中には青く澄み切った空と、エメラルドグリーンに輝いた海を眺めている僕が映っていた。写真には沙樹さんはいないけれど、確かに僕の横に存在していた。僕はその小説のタイトルを『青い夏と青い海』と記した。

この小説が入選しなくてもいい。彼女を、舟場沙樹という人物を言葉にできたなら、それでよかった。今後どんな夏が来ようと、こんなに明るくてよかったとは思えないだろう。きっとこの小説は僕の中でかけがえのないものになるだろう。